

坂本比奈子先生の思い出

杉浦滋子

坂本比奈子先生が平成25年11月13日に他界されました。二年ほど前に病が発覚したものの、必ず打ち克つというお気持ちで闘病されていたとのことですが、分析を待つタイのムラブリ族の言語、ムラブリ語の資料は残されたままとなりました。いかばかり心残りだったことでしょうか。ムラブリ族の生活環境が変化し、言語が姿を大きく変える前の状況の記録にとどめることを、先生は誰よりも強く願っていらっしゃいました。でも、坂本先生が現地調査に伴われた伊藤氏、二文字屋氏が先生の資料を文字化し、グロスをつけて本号に寄稿して下さったことで慰められています。先生の遺志を継いでムラブリ語の研究を続けてくださる若い研究者がいらっしゃることを本当に心強く思います。また、先生に生前のご報告はできませんでしたが、先生の退職時に私が指導を引き継いだ今村泰也さんが今年晴れて博士号を取得され、研究者としての道を順調に歩まれる予定であることも先生はきっと喜んでくださっていると思います。

坂本先生は東京大学言語学科を卒業されているので、私にとっては大先輩にあたりますが、麗澤大学とのご縁ができる前は個人的にはお話したことはありませんでした。でもなぜでしょうか、お会いしてすぐにとっても気安くお話ができ、全く構えることなく接することができました。それ以来、学内で、谷川での宿泊オリエンテーションで、また学会に出席の折にも楽しくご一緒させていただきました。先生は学生をフィールドワークに連れて行って経験を積ませることを心がけていらっしゃいましたが、鳥取へのフィールドワークには私もご一緒させていただき、鳥取の方言の調査から得るものも多かったですが、鳥取の地酒や温泉も楽しみました。

麗澤に長く勤務され、麗澤大学での旧日本語学科、そして大学院での日本語教育学専攻の運営に尽力され、麗澤の教育に大きく貢献されました。特に、先生の下でタイ語を学んでタイに留学する学生を育てられ、先生のご縁でタイからの留学生も多く麗澤のキャンパスで学び、両国の交流に貢献され、研究科長としては言語教育研究科英語教育専攻の創設に尽力されました。日本語学会では長く危機言語小委員会で活動されていました。

おしゃれでおいしいお酒がお好きで生真面目だった先生。研究室はいつもきれいに整頓され、お茶道具が用意され、よく卒業生からのお茶やお菓子をごちそうになりました。日本語学科ができたころには学生とスキー旅行に行ったり、学内のテニスコートでテニスを楽しんだりされたとのことで、そのような体力があったからこそタイ山岳地方でのフィールドワークにも何度もお出かけになったのでしょう。

実は、一昨年の秋、藤本幸夫先生が富山におわら風の盆を見に来るようにおっしゃってくださったので、坂本先生と私で富山に旅行する予定を立て、先生はあれこれ考えて旅程を練ってくださっていたのです。坂本先生や藤本先生ご夫妻とご一緒できる、ととても楽しみにしていた旅行ですが、直前に先生からご病気のため見合わせるとのことご連絡をいただきました。絶対一緒に富山に行ける時が来る、と信じていましたが、それは叶いませんでした。

先生、毎年ボージョレ・ヌーヴォーを楽しみにしていらっしゃいましたね。私は不調法ですが、今年から毎年飲みます。